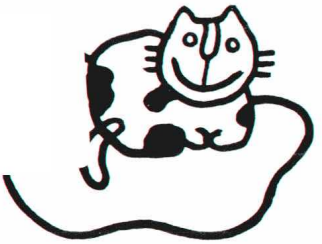
晴れ、ときどき苦もあり

上野瞭

PHP



晴れ、ときどき苦もあり

上野瞭

PHP

〈著者略歴〉
上野　瞭（うえの　りょう）
1928年京都生まれ。同志社大卒、同志社女子大学教授。
著書に、「ひげよ、さらば」「さらば、おやじどの」「現代の児童文学」「砂の上のロビンソン」「アリスの穴の中で」などがある。

晴れ、ときどき苦もあり

1992年3月23日　第1版第1刷発行

著　者　上野　瞭
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
東京本部　〒102　千代田区三番町3番地10
第一出版部　☎03-3239-6221
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601　京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社大進堂

© Ryō Ueno 1992 Printed in Japan
落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたします。
ISBN4-569-53256-X

晴れ、ときどき苦もあり＊目次

1 猫ごよみ・5
2 各駅停車・57
3 洛中ぐらし・99
4 たそがれ日記・131

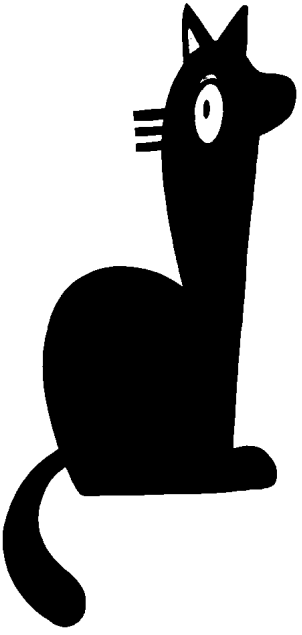
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

5　人生の付録・

177

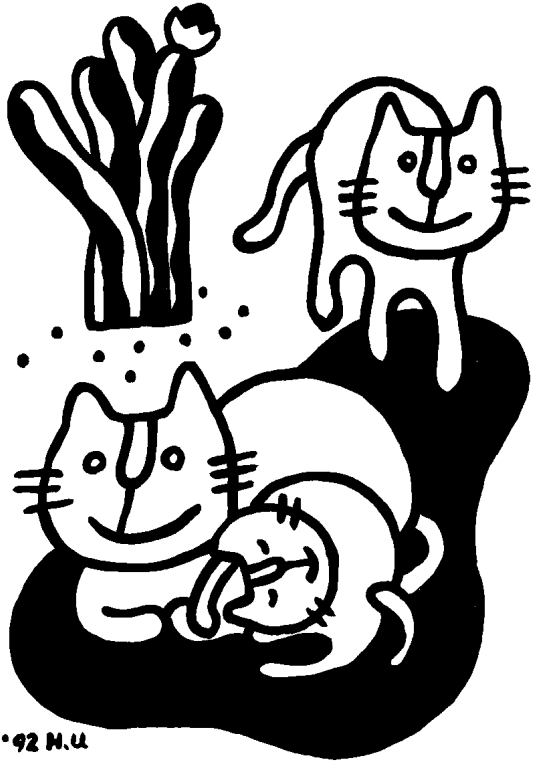
ひげよ、さらば

あまりにも長い蛇の足—あとがき—



ブック・デザイン——上野宏介

1 猫ごよみ



命みじかし

最初にその猫を見たのは去年の秋だった。本当はそれ以前にも見ているはずだから、この場合の「見た」ということは「意識しだした」といったほうがいいのかもしれない。

全身泥まみれの骨の浮きだした痩せた猫が、スーパーの勝手口のあたりからTAさんの家の門口に向かって走っているのである。口のはしから肉切れのようなものをたらしているのである。懸命な思いつめた顔を見て（猫にそんな表情はないという人もあろうが）、ぼくは思わずTAさん宅の近くまでいってみた。

TAさん宅は、ぼくの家から東へ二軒目、御主人は小児科を開業している。道路から正面入口まで何段かの石段がついている。門の横に植込みがあって、そこに三匹の猫がいた。

泥まみれの痩せ猫は、その中でも取りわけ小さい生まれたばかりの二匹の子猫にエサを運んでいたのである。争うようにして子猫は、泥猫の口から肉片を引き離し、あっという間に食ってしまった。泥猫はすぐさま今きた道を取ってかえしたのである。

ぼくはその猫の行方を確かめるべくスーパーのほうに移動した。食品運搬の大型トラックで勝手口の辺りは見えない。しゃがみ込んでタイヤや車体の隙間から痩せ猫の姿を探す。いた、

いた。泥んこ猫は、スーパーの勝手口の前に置かれた青いごみ容器の中に顔を突っ込んでいる。ポリ袋を鼻でかきわけ、食えそうなものを探し続けている。

振り向くと石段の上の二匹の子猫は、首をのばし泥猫のつぎのエサを待っている。その横にいる一匹は子猫たちの兄貴のように見える。毛並み顔立ちがよく似ている。これはずっと後でわかったことだが、この猫、兄貴ではなくオトウサンだったのである。

ぼくとカミサンは、それ以来、時どき表にでて泥猫の姿に注意を払うようになった。痩せたその猫が、よたよたとエサを運ぶ姿を見て「大変だな、オカアサンは」と奇妙な感動を覚えるようになった。

四匹は野良猫である。TAさん宅の裏にある物置に住んでいるらしい。そこで出産があって、生まれたばかりの赤ん坊猫が死んでいたという話を聞いたことがある。TAさん宅では強制的に追いだすことをしなかった。

「食べもの与えたらあきまへんで。猫は居つきますからな」

近所の人はTAさん方に忠告までしているという。現にスーパーのおにいさんは、勝手口のごみ箱をあさる猫に、水をぶっかけたり棒で一撃を加えたりしている。布団屋のおばさんが傘を握りしめて、野良猫を打ちすえるべく近づいていくのを見たこともある。ぼくはその度に胸がかすかに痛むのである。生きる権利は人間にしかないのか……と、叫びそうになるのである。

わが家に十六年いる自閉症の同居猫は、外のその苛酷な状況を知らない。仕事の手をとめると、ぼくは溜息をつくようになった。

続・命みじかし

ぼくは猫好きだろうか。時どきふっと考えこんでしまう。なぜならぼくは、二十余年、猫と同居しているくせに、カミサンのように猫と枕を並べて寝たことがないからである。そういうことになれば、きっと猫を追いだすだろうなと考えている。

カミサンは十数年来、じぶんの布団の半分を同居猫に占領されている。猫にはじぶんの枕があってそれに顎をのせて眠るのだが、時にはカミサンの枕まで領界侵犯して、人間さながらに気楽ないびきをかいていることもある。ぼくらは人並みに旅行にだっていきたいのだが、彼女がいるおかげで（同居猫はメスである）二人して家を空けたことがない。まだセガレが学生で家にいた頃（もう十年以上前の話になるが）、同居猫を彼に押しつけてイギリスへ出かけたのが最後である。

猫との同居は、そのセガレが子どもの頃、近所の家でもらってきたことから始まる。彼はプリンが好きだったので、猫もまたプリンと呼ばれた。ぼくは「ペットを飼う」という考え方が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

嫌いだから、彼女に（プリンもメスだった）さほど関心を持たなかったが、ぼくが勤め先から帰ると二階から駆け降りてきて、かならず靴を脱ぐ前のぼくの肩に跳びのった。

プリンの後にホブというオス猫が同居するようになり、この猫の好物はホーレン草のおひたしだった。彼は悲惨な最期を遂げている。血まみれになり隣の家の庭で気息奄奄で発見された。カミサンが半泣きになって毛布でくるんで連れて帰ってきた。明らかに猫同士の爪の結果ではなく、人間が暴行を加えた状態だった。

ぼくの家の裏通りの隣組で、飼い猫追放の話し合いが持たれたのはその頃である。某さん宅では泣く泣く猫を知人に託するか捨てるかしたということだった。

屋根瓦を割る。植木をひっくりかえす。うるさく鳴き立てる。泥棒のようにしのびこんでくる。その他、どういう理由が数え立てられたのか知らないけれど、「人間を襲う」ということはなかったはずだ。猫は道具を使わない。使えない。棒や傘を握って命あるものを撲るのは人間だけである。石を投げたり手榴弾を投げたり、銃を構えたり発射したり、時にはミサイルのボタンを押すのも人間に限られている。猫は、したくてもそういうことはできないし、第一そういうことを考えることさえない。本能のおもむくままに恋をし、性の交わりを持ち、子どもを産み、食物を求める。それが犯罪に当たるのか。猫たちは、人間に内在している情動をストレートに表現しているだけである。おなじ生命体なのである。

瀕死の二代目同居猫は、カミサンの手の中で絶命した。もし猫に言葉があるならいい残すべ

きことがあっただろう。苦しさを訴えることができないだけ余計ぼくらの胸は痛んだ。
しかし、である。こういうぼくもまた、猫の死に手を貸しているのである。

共犯者意識

ぼくの家の前に箱詰めの猫を捨てた人がいる。五年前の話である。一匹二匹ではない、三匹である。手紙が付いていた。

〈野良猫の子どもですが、きっと可愛くなると思います。うちにはすでに二匹いるので世話ができません。お願いします〉

そういうことが記してあった。ぼく宛の手紙になっているから、その人はぼくのことを多少知っているのだろう。ぼくが『ひげよ、さらば』などいう猫の物語を書いていることや、自閉症の猫と同居していることを。その人はたぶんぼくのことを、じぶんとおなじ猫好きと考えたに違いない。箱詰めの猫三匹を見て、ぼくが激しい怒りにかられることなど想像もしなかったのだろう。激怒……と書いたが、冬のその朝、突然の届け物に仰天したぼくは、正直頭に血がのぼり、心臓なんか急速の鼓動で苦しくなったのだ。狼狽(ろうばい)と腹立ちで空気まで薄くなった。腎臓障害のぼくと、五つか六つの病気持ちのカミサンが、一匹の同居猫と共にどんな生活をして

いるか、その人はまったくわかっていない……と怒鳴りたくなった。

その頃、ぼくは五時起きをすると、学校にでかける前のわずかな時間に新聞連載の小説を書き、時間になると自転車に飛びのって出校していた。カミサンだっておなじで、猫を相手に毛糸玉で遊んでいたわけではない。一日一日が考えられないほど雑用で詰まっているのだ。自閉症の同居猫も長い時間かけてぼくらの生活のペースに適応し、相互に干渉し合うことなく日々を暮らすようになっていたのだ。突然の猫三匹をどうせよというのか。仕事さえ手につかなくなったぼくらは、完全に頭を抱えた。

猫好きなら、どんな猫でも受け入れるだろう……という一方的な考え方がやり切れない。猫好きにだって「ペット」と考える人もあれば、そういう考え方に反対のものもあるのだ。ぼくが「猫と同居する」という場合、最小限、家族の一員として「迎え入れた」特定の猫にだけは責任を持つということだ。

野良猫の届け主は、そこを考えていない。じぶんが責任の持てないものを他人なら受け入れるだろうと勝手に決めている。責任の転嫁もいいとこだ。他人の暮らしや考え方を、どうしてそうも簡単に決めつけられるのか。人間は神様ではないから何でも彼でも受け入れられないのだ。

ぼくは保健所に電話した。野良猫の箱を自転車に積むと係の窓口へ運んだ。強制収容所のガス室へ仲間を追い立てる囚人の気持だった。情けなくて腹が立って、みじめで不快で自己嫌悪

の塊りだった。どこの誰だか知らない届け主が本来味わうべきやり切れなさを理不尽にも、肩がわりさせられた思いだった。

その頃新聞連載中の小説『砂の上のロビンソン』の中で、猫を押しつけられる少女のエピソードを書いた。書かずにはいられなかった。それでも、ぼくの心は晴れなかった。

同居猫の日々

新学期の最初の時間に、ぼくはまじめな顔でこういうことがある。

「テストはやらない。レポートで評価します。提出されたレポートは、家に持って帰って二階から撒きます。うちの猫が飛びだしていって、そいつを前足で押さえます。最初に猫が押さえたやつを百点とします。そういう評価の仕方ですからレポートを忘れないように」

真剣な顔でこっちを見ていた女子学生諸君は、あきれた顔をしたり笑いだしたりする。中にはバカみたい……と軽蔑した目でにらみかえす者もいる。ぼくとすれば、一年間の講義を始める前の一種のウォーミング・アップなのだが、さて、レポート提出の時期になると、その言葉を忘れないでいる学生のいることに気づく場合がある。ぎっしり書いたレポート用紙に、ホッチキスでカツオブシ・パックを留めている人があるからだ。「お猫さまへ」という伝言まで付

いていたりする。ムム、オヌシヤルナ……と、最初にそれを発見した時は感動した。山積みのレポートを読むのである。疲れて溜息をついたりする。その苦労が一瞬いやされる思いがする。

同居猫は偏食である。ミルクも飲まないし魚の切り身も食わない。もっぱらよく乾いたチリメンジャコまぶしの御飯である。それを晩餐(さん)とすると、朝はキャット・フード（ビーフ味）、昼は二グラムのカツオブシである。猫は二食でいいという意見もあるが、彼女は三食きちんと請求する。チリメンジャコは、もっぱら「ニシキ（京都の人間は、錦市場のことをこう呼ぶ）の「京一」という店で買っている。その店の品物が最上とかどうとか、そういう意味はない。たまたまその店で買い始めたら、つぎもその店で……というふうになって、もう十年近くそうしている。ぼくは万事に保守的なのだと思っている。ただの惰性なのかもしれない。こういう同居人の性癖は猫にも感染するとみえて、十七年間、同居猫のほうもかたくなにみずからの食生活を守っている。走り出してレポートを押さえるなんてことは、夢にも考えない。ひたすら眠っている。昼も夜も。

ペローの書いた『眠りの森の美女』という昔話では、百年間、お姫さまは眠り、王子さまとの出会いの夢を見続けていたことになっているが、同居猫は何を夢見ているのだろう。異性を求めて尻を振ったサカリの季節はとっくに去っている。便秘に苦しみ、真夜中、狭い部屋の中を走りまわり、所定のトイレに豆粒ほどのウンチをひねりだし、残りの太いそれを畳の上にぽ

とりと落としていたりする。胃腸も弱ってきたのか、食べ終わったばかりのものを所構わず吐く日もある。ぼくとカミサンは紙やアルコールを含んだ脱脂綿で拭きまわっている。同居猫を見ていると、これが命というものだし、その自然な姿なのだなと考えてしまう。彼女と共に、今、ぼくらもまた確実に老いつつある。

最初の出会い

その猫が、ぼくの家の二軒東隣、小児科医院のTAさん宅の石垣の上で眠りこけているのを見たのは、ほぼ半年前である。

その猫というのは、泥まみれのあばら骨の浮いた親猫の口から、スーパーのごみ箱でやっと見つけたような一切れの食い物を引ったくるように受け取っていた子猫の一匹である。白地に茶の、両手の掌にのるくらいの大きさで、子猫というよりもまだ完全に赤ちゃん猫だった。

その日は初冬にかかわらず陽ざしがやわらかで、石垣のそこには小さな陽だまりができていた。チビ猫は頭を胸に押しつけて、文字通りまん丸になって眠っていた。体が規則正しくゆれていた。

ぼくは、じぶんの胸が変に熱くなるのを感じた。若い娘がよく口にする「カワユイ」という

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com